

こんにちは 健保組合です！

株式会社仁と運送の巻



長澤 社長

壁に貼ったカレンダーも残り一枚となり、四年に一度の大イベントであるオリンピックがアトラクタで盛大に開催された一九九六年にあつては、〇日あまりで別れを告げなくてはならなくなった十二月九日、事業所訪問の第二回目として、流山市に所在する株式会社仁と運送にお邪魔しました。

この日は、春を思わせるようなやさしい陽光が降り注ぎ、車中は南国のようでありました。

私たち事務局は、週明けということなのか、渋滞する国道一六号を北に向かい、今日の目的地に到着しました。外はさすがに師走というだけあって、空気が冷たく感じられました。

株式会社仁と運送は、物流に不可

欠である幹線道路にアクセスがよいという条件を十分に満たしてあり、国道一六号、国道六号さらには常磐自動車道にもほど近く、後にお聞きすることとなった『東北攻め』には非常に都合のよい立地条件がありました。

社屋は二階部分が事務室になっており、「こんにちは健保組合です」と室内にお邪魔すると、健康管理事業等推進委員をお願いしている早崎さんが「遠路、ようこそ」と笑顔で私たちを出迎えてくださり、事務室で執務しておられた職員の皆さま方からもご挨拶をいただきました。応接室に案内していただき、しばらくして、お忙しいなか、時間を割いておつき合いくださった長澤社長が入室されました。

家庭円満を心がける

「エネルギー、精神安定を 図るよう力説

次に話題は職員の健康管理、教育に関するに移行しました。

長澤社長は、「ドライバーは仕事をおして知らないうちに、皆さんが思っているより自己流の健康管理が身についている」とおっしゃいました。食事についていえば、栄養、ホリユームのある料理を好み、ドライバー同士の情報交換により、こうした要素を満たした店の常連となっているとのこと（そういえばトラックのいつも停まっている飲食店は確かに「うまい」）。休養も十分に取れ、自分の城（車）の寝室は、いつもクリーニングが行き届いていると話されました。そして、時間に制約されることが多い業務なので時間には几帳面、つまり翌日の仕事に際して前日から生活面に気を配っていると続けられました。私たちが、あまり聞くことのなかったドライバー像が浮き彫りになり、改めて感心しました。「ただし」と同氏は付け加えられ、健康に自信を持ち過ぎて面も多、健康診断等には積極的に足を向けないのが欠点と締めくくられました。そして、社

バイタリティーと斬新な アイデアで「ドライバー から会社を大きく育てる

取材は、はじめに長澤社長から会社の歴史についてお聞きすることとなりました。

仁和（設立時は「じんわ」と読ませようとしたそうですが、中国では縁起のよいときとされる「にわ」を採用されたそうです）運送は、昭和四十年十二月設立。東京オリンピックが前年に行われた余韻もあつてか、運送の需要は高く、仕事は順調に確保できたとのこと。設立当時は大きな利潤を追求する企業に育て上げるという目的で会社組織にしたのではなく、それまで「ドライバー」として生活していた同氏が「生活の糧を稼ぐのにいちばん手っ取り

員の教育に関しては、常にミーティングを開かれ意思の疎通を図り、いつも口に出されていらつしやるのは、「家庭での不安がトラブルにつながる」として、家庭円満を心がけることにより公道を職場とする者の精神的安定を図ることが大切だと力説されました（社員と家族のコミュニケーションを図る場として二カ月に一度、誕生日会を開いているのだそうです）。私たち健保組合は、身体と心は相反せず、ともに健康であることが本当の健康状態だということをいろいろ媒体とおして啓蒙してまいす。氏が言葉は異なるにせよ、以前から職員教育の一環として実践していらつしやつたのはとても心強いことです。

身の回りのことをすべてを エネルギーの源とする

長澤社長の興味深く、目からウロコが落ちるような話題に終始した今回の取材も終了の時間が迫り、最後に氏自身の健康についてお聞きすることとなりました。

同氏は、数年前から漢方に凝っておられ、毎日欠かさずある薬草を煎じて飲んでおられるとのこと。また、知る人ぞ知るトップハンドの実力を

早いのが運送屋だ」と思い立ち、創業したのだそうです。「会社がこんなに大きくなるなんて夢にも思わなかった」と感慨深そうに話されました。しかしながら、ここまで会社を育ててこられた裏には、社長自身の意識改革を含めた一方ならぬ苦勞があったことも事実です。

「会社を興じた以上は、従業員のためにも自分自身のためにも、さらには、社会のためにも何かやらなくては」と設立五年目ごろから自覚しはじめたそうです。

当時から仕事でお付き合いのあつた会社の影響が大で、「物流を制すれば企業が伸びる」というその会社の経営理念に感銘を受け、それを念頭に置いて経営戦略を展開されてこられたそうです。「物流は変化する」という持論のもと、三角輸送（トラックを三角形——例えば、千葉⇨横浜⇨茨城——に走らせ、その二辺を実車にすることにより、この業界の泣き所である空車を極力防ぐということだそうです）を推進し、バブル時代は設備投資・事業拡張はせずじつと我慢をし、不景気のときにシェア拡大を図っておられるということですが、冒頭「東北攻め」と書きま

もつゴルフも、人に負けるのが嫌いで努力されたのだそうですが、それが健康のパロメーターであり、毎日のトレーニングも欠かさないそうです。身の回りのことをすべてをエネルギーの源としてしまう氏のポジティブな生き方に、私たちはわが人生も改めなくてはと考えさせられることが多々あったのが正直なところでした。

こうして、お聞きすればするほど氏の人間としての魅力に引き込まれていった、今日の取材も無事終えることとなりました。

取材にご協力いただきました皆さま、ありがとうございます。

さあ、いよいよ本誌が皆さまのお手元に届くころには、一九九七年がスタートしています。ご家族そろって輝かしい年にしてください。もうすぐ二一世紀ですよ！

